

量的な確認が殆ど得られていなかった陸棚斜面の資源についても、メルルーサ(A)、シルバーおよびキングクリップ等の商業的価値の高い資源が比較的豊富に分布することがわかった。しかしながら、このチリー南部パタゴニア海域は漁場面積が小さい上、資源量も多くないことから、これらの資源の利用には十分な配慮をする必要がある。

この両協同調査は、アルゼンチン・チリー両国とも漁場開発のために南方パタゴニア海域の現存資源量を把握することを主目的としていたが、漁業が存在しない処女資源、特に底魚資源では面積計算法による quick assessment が有効な手段であることがわかった。また、開発センターのような開発調査機関では将来さらにこの種

の協同資源調査の要望が増えることが予想され、これに対応するための財政・組織上の整備および関係機関との協力体制の確立が早急に望まれる。

#### 参 考 文 献

- BAHAMONDE F.R. (1978) Distribution and relative abundance of the main demersal resources between Corral (40°00'LS) and Cape Horn (57°00'LS). *Investigacion Pesquera*, Instituto de Fomento-Pesquero, Chile, 20 pp.
- 藤波徳雄 (1977) 中南米諸国の水産資源開発政策について。JAMARC, 13, 2-10.
- 畑中 寛 (1979) 深海丸によるアルゼンチン沖調査結果—予報 (1, 2 次航海), 水産海洋研究会報, 34, 50-55.

## 4. 討 論 日本と中南米の開発途上国との協力研究についての二、三の私見

奥 田 泰 造 (ベネズエラ国立オリエント大学)

海洋の性状からみて、これを研究するためにあたっては、国際的な協力がどうしても必要となってくる。海洋資源の開発、保護そしてその有効な活用を考える場合には、特に国際間の協力研究が要望される。

国際協力研究に際しては、参加国間の give and take の相互の扶助関係が基本的に保たねばならないと思う。しかし純粋な学術研究を目的とした国際協力の場合には、この基本的関係が維持されやすいが、漁業研究の様なとくに当事国間の利益の追求を背景とした国際協力研究がおこなわれる場合には、この様な相互扶助の関係を密に保っていくことが困難となることも多いと思う。先進国間での国際協力研究では漁業面でも、まだ相互の give and take の関係を保って協同作業が容易に行われるように思う。しかしこれが先進国と開発途上国との間の国際協力の場合には多くの問題が存在するように思われる。

そこで先進国の一つの日本が、私の住んでいる中南米の開発途上国との間で協力研究をなす場合に遭遇すると考えられる幾つかの点について私見を述べたい。

これ迄征服者と被征服者の盛衰の歴史から本能的に身についたものと考えられるが、開発途上国の多くの人々は先進国に対し強い不信感を持っている。この不信感人類の長い歴史をさかのぼらなくとも、ごく近い歴史の中で先進国の人達の未開発国或いは開発途上国の人々

に対する約束の不履行や傲慢さなどから来ているように思われる。

先進国が開発途上国に対して一つのプロジェクトについての協同調査研究を提案する場合には、当然何らかのメリットを考えての上だろうが、それが相手国の利害にどの様にかみ合うかを十分考え、善意の無理の押しつけをしないことが必要だと思う。

先進国と開発途上国との間には当然のことながら研究員や研究施設の質と数に大きな違いがあり、先進国の間で保たれる協同研究の基本的関係 (give and take) は、やや異った形をとる。即ち先進国と開発途上国との間では、前者は give and give 後者は take and take の形を結果的にとることが多い。

先進国が開発途上国と協力調査研究或は協同事業を行う場合、特に大事なのは相手国の事情 (政治、社会、経済等の歴史的背景と現状) とりわけ民衆の感じ方、考えていることをよく知る必要があると思う。国際協力のプロジェクトの交渉相手となる政府代表や事業家代表の興味、関心及び考え方は必ずしもその国の民衆のそれらと一致していない。むしろ両者間に大きな開きのあることが多いのが実状といえる。

中南米の歴史的背景が主因だと思うが、そこでは多くの人々は欧米、特にヨーロッパに目を向け、皮膚の色からもヨーロッパ人により親近感をもっている。同じ先進

国といっても日本に対する中南米人の感じ方には、日本の科学技術、経済のすばらしい発達、躍進に対する高い評価とは別に、欧米先進国に対するのとははっきりした違いが看取出来る。この点は中南米の国々と協力関係をもつ場合に念頭においておくべきだろう。

中南米の開発途上の国々では、かつて日本がそうであった様に、目下先進国のレベルに追いつくべく、いろん

な形で努力をしている。その為に、先進国の実のある援助協力を必要としている。日本が開発途上国に対して援助する場合、前述の様な点を考慮し、より有益なプロジェクトを選択、提案し、適格な人材をえらび、協同調査研究の開始される前に参加者は相手国の言葉に通ずることも考えていかなければならないことを最後に付言しておく。